

「猫好きな人だけでなく、嫌いな人も猫と共生できるまちをつくっていくことが、私たちの目的です。」

永年にわたり、飼い主のいない猫と人が共生できるまちづくりを目指し、地域猫活動に尽力されている方々。市内の飼い主のいない猫に去勢手術を施すほか、猫に関するトラブル解決やセミナー開催など地道な地域猫活動が実り、平成24年度以降国立市では殺処分0件を達成。

環境保全功労

ふくい
福井

かずえ
和江氏

ごとう
後藤

ゆみこ
由美子氏

—活動を始めたきっかけを教えてください。

【後藤氏】 飼い主のいない子猫が家の近くで死んでいるのを何度か目にしたことです。そのような状態を見るのが嫌で、対策を色々調べた結果、猫が子供を産まないよう不妊去勢手術を施すしかないとわかり、個人で家の周りの猫を病院に連れていったのが始まりです。

【福井氏】 ちょうど子どもが高校を卒業し、ボランティア活動などをしたいたと思っていた時に、保健所で開催されていた猫の殺処分に関するパネル展を見たことがきっかけです。そこで紹介されていた、飼い主のいない猫に不妊去勢手術をする活動に興味がわいて。

—これまでどのくらい不妊去勢手術を施しましたか。

トータルで2000匹は処置したと思います。かつて「猫の事務所」という活動団体に所属していた頃は、飼い主のいない猫が爆発的に増えた時期で、年間200匹近く処置していました。その後自分たちで活動団体「猫のゆりかご」を発足させた頃はだいぶ落ち着き、年間70匹くらい。今はさらに減ってきています。

—活動において苦労された点について教えてください。

現場で捕獲して病院へ連れて行く、これが基本的なスタイルなのですが、猫の発生頻度が高かった時はこのサイクルが連続して大変でした。捕獲器は、放置してしまうと子どもが触れる等の危険性があり、猫の発生の連絡があつてから設置するのです。朝晩に関わらず、連絡を受けては設置しに行っていました。

今は、猫の通り道に自宅がある方に捕獲器の設置してもらったり、安価で去勢手術を施して下さる動物病院の先生が声を掛けてくれたりと、多くの方々からご協力いただき、苦労は少なくなりました。

—活動の課題とは何でしょうか。

私たちの活動に対する市民理解を高めることが目下課題としてあります。猫に手術するのはかわいそうとお思いの方もいらっしゃいます。しかし、野良の子猫は他の猫や動物に食べられてしまう事があります。不妊去勢手術をせずに放置すると、その可能性が増えるのです。手術を否定したほうが猫にとって悲惨な状況になる事実を、多くの人に知ってもらう必要があると感じています。

—永年にわたり活動を続けられていることで得た大切な事があれば教えてください。

ボランティア、地域住民、行政の三者が連携するための協調性が大切だと判りました。猫好きな人だけでなく、嫌いな人も猫と共生できるまちをつくっていくことが私たちの目的です。そのためには、不妊去勢手術の必要性、餌やりに関するマナー、糞尿被害を未然に防ぐための対応など、飼い主のいない猫への対応を三者が協働で実践しなければ、猫に関わる問題はなりません。その意味で、この活動は、動物愛護としてという以上に、環境問題として一丸となる必要があるものだと考えています。

—最後に一言お願いいたします。

国立市は、平成24年から26年にかけて、殺処分、動物愛護センターへの持ち込み共に0件、平成26年は動物愛護センターへの猫の苦情も0件でした。このような成果があるのは、行政と市民の皆様との多大なる協力の結果だと感じ、本当に感謝しております。これからも、本活動に対するご理解とご協力をお願いいたします。